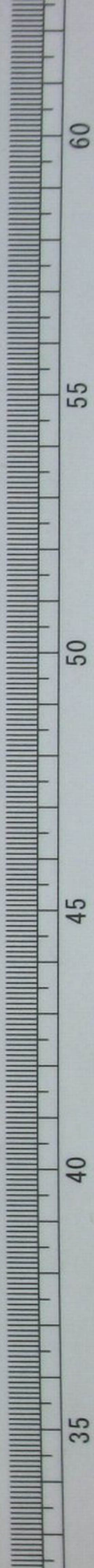


中村俊定文庫

中村俊定文庫
文庫 18
935





梅鑑

梅、えん、海、行、母、之、靈、の、心、
 層、の、羽、浮、あ、る、は、と、
 か、と、我、名、を、か、こ、め、し、
 木、子、群、れ、を、去、凍、疎、雪、
 の、心、を、か、こ、め、し、
 谷、の、心、を、か、こ、め、し、

春は...
威...
再々

逸志稿 棘庵

母...
也...
梅



年...
...
伊...

山...
梅乃...
雀之房一磨

心何ん人の後成
 こころ梅
 かたしこころかたし
 妻は山里

梅より心は常に梅の香あり

漢風

梅の香は心の中にあり
 心の中に梅の香あり

香筒の鼻出し梅の香あり

吞舟

下	く	心	正
有	志	心	心
る	志	心	心
	志	心	心

あやしくは海を渡りては、安由の地

馬堂

森羅

地は終る、子と母とをしのぶ
 今朝ふとわたりて、吾はゆきとて、安由

深き水に舟をこぎ、梅の香

安車

定家
 大空を越ゆるの白
 かしきしき
 春乃
 月

梅の信
 其齋
鼠姑齋

光陰を過客浮世
 多しと思ふ紫雲の洞のまはり

学也日流川のぞは春の中
 野川くさくさ小結のき浪
 太刀持の目もやまぬま子好とく
 杉葉打まきゆんちり
 腰張もやしあけしに月の岩
 虫と魚とこは枕り
 舊室
 棘菴
 柙居
 吞舟
 溪梁
 其齋

陶さへ多れとありしも可おとかり 奈津町
 賤原ありしと髪を多し一髪 一磨
 塵を多し空も垂れ奈此日 馬堂
 除く出ありて袖へ赤子あり 舊
 雨さふやう右へまり結を九折 棘
 紹巴ふ麻をゆりせり歌 柎
 今有るに稲多葉の月を吹出深 吞
 秋叶夢のさふ雀道ゆく 溪
 酔へて吹出布の津下義を何下へや 其

二階よりあるをいふも 船行馬
 矢少れと山あき花の波は静 一
 雲を帯よむとじり 奈
 出替れ唯今まくと袖をふて 溪
 四月をありてをもおまじ 棘
 胡麻り貴船の供御のいそがし 舊
 里へまをしりし山原を 吞
 録仕事きしに女子とおありし 柎
 和尚を燈をりてまじ 一

禪の金ひやくと小歌——
 今にむしきぬの神も憎まぬ
 暖簾の影も乳守のあまを
 通達ハ中ノぬぬの修者
 藤一あはれと月のおまも
 出たり馬の鈴子も
 大のそ所橋の白ハ鳴り
 夜下はち小春の秋
 願杖十稜寫と三川
 馬

公の雪りけく
 旭あまは
 梅の夕涼馬

春興佳句到来の遅速不俚く
 座須次不回混雜

微和

嘆を免そ十日めあがり梅の人
 杯もい落の志やめ
 雪村がまろも嘆乃屏風ふく

蒼天

蒼き馬やおほくの鼻より梅の義理主

春は扇子紙ひくく満足 棘菴

餅米の葩煎紙紙が松りくく 舊室

良時

春の節や鶴乃親子此柳えや 可久

めまけややあ後が水の肌合 棘菴

記行を花こころ紙ゆき 舊室

万の事懐くやまかたを物く
念とめりしりくあまの ちう記

春雨多叶の恵より乳房の糸 沙鷗

子雀よりしるかき子 舊室

首途り胡宴の以せゆふ 棘菴

哉やんと蝶もかや竹の垣 蓮阿

夏近死し山やおりりぬ水鉄 吾汶

去りけなく玉ちり紙通る柳が 蓮水

風をぬくむ柳を人の姿の那 北湖

猫の恋たぐい大野松極の 下 青峩

極を居る不との寒くや梅りまれ 馬光

春の雲の漸く／＼降り初るぬ 吳大
 少海をや漕りも又鈴を鳴らす 鼠群
 山をふあふ／＼流し 藪をぬき 猪室
 鳴りかえり 狐の白鼻一芥をふるが 活磨

情をあらわしてほろろと流るるかえり道の
 下へ車りれと音子の出まへむぬし
 金童山すすむるおのり

春かほろろをむく／＼は 梅垣の柳 活童

 林のかさめも 梅の下 空 舊室
 吹うけのふたは 春を催すかたて 耕菴

伊賀越や 山は雪の 破のうら 空 占屋
 けしきとわ 日々に 春の流す 素染
 かき流すや 山の能の 觸るし 舊和
 かけぬり 小日ハ 片を くと上り梁 舊我
 梅をふれ 是も 柳を ぬき 菜菔 敬由

 即 夢菴

 さうして 雪と 降る 干鱈 十鈍
 世をふれ ぬ山を 流す 世をさく 今
 春より 先植ふ 屋や 春の色 芳水
 うへへ 変れ 針が 何なり 汗の香 柳居

梅さくや硯出——是内玄園 常仙
 平野まを思り流あふり正の正 長鶴
 廿々さくや細谷川のあや煙 渭北
 釣舟の移りて出たるのあや 常丁
 下駄を以て十郎及の梅更の家 貞國
 梅不寐てあふりあふりあふり 莊牛
 龍骨車のあふりあふりあふり 吟洲
 正のり香やまをよるあふりあふり 友里
 梅の序りあふりあふりあふり 柏船

白梅や楊梅あふりあふりあふり 節士
 日向梅やあふりあふりあふり 存義
 春駒あふりのあふりあふりあふり 文國
 根のあふりあふりあふりあふり 文石
 書付て摘む七梅や屋簷守 万英
 けきも子あふりあふりあふりあふり 雉火
 書かぬ小猫あふりあふりあふり 露月
 宮王の机あふりあふりあふり 田社
 志波の波あふりあふりあふりあふり 平砂

土より木より涌の昆蛇小蝶 試山
 梅子ぬふふふの自むり 乙羽
 貞歌のいろくくぬぬ梅子 祇承
 狐火小境杭あり 筆端
 昏雛の箱立出て 貞山
 梅子乳安師匠の年 貞質
 雪の世の嫌 貞陸
 梅子の世の嫌 貞陸
 梅子の世の嫌 貞陸

時乃を端ふいけ 貞陸
 梅子の世の嫌 貞陸
 苗代のおぼろ 貞陸
 早見の世の嫌 貞陸
 菜の世の嫌 貞陸
 の世の嫌 貞陸
 蝶の世の嫌 貞陸
 おりしとぬ 貞陸

汲鉄也 益志同 春風同 上遊同
 鴨の巣也 浮同 春風同 舊水同
 春風也 春のたゞ純のやう同 己千同
 山吹也 駒と先同 世新雨の 地 梅室同
 土埃り 春のあつ後 此同 乙角同
 やまか小丸 瑞を思同 維精同
 先同 一徳同
 如竹同
 由同

遊水也 田鱈同 南宮同
 籠同 齋狼同
 何同 権室同
 中同 陸宗同
 大芥部同 根同 鈎浦同
 惜同 水車同 齋室同
 甲同 松石同
 松林同
 耕同 舊也同

春の七歌かけし破る 紀逸
あけしこハ 潜るのあり 麦うけ
えあふくも 目も 文則
九言のつまき 畑のまき 昌同
旅夜春のわきま 緝業
雪より 窓の梅あ 千箭
雪の曲りあり 日 星 沾耕
あけし 東牛
をた 義虫

春遊子題 二雄

淡晴

里のしき 其庭

芳州

瞬の羽 陌阡

惠風

梅の香 待和

遅日

詠勸進 七藏

床之縁も梅の立枝より
鮮明
嘯鶴

唯ごきへ具は夏序より多ふ不二百六

和景

梅の香物に祠あり謂あり 大政

大 庭 園 抄
音か知ぬ新秋より梅の傍に用
窓をよめるか梅の傍に用
今より埋火をかけるは梅の傍に用
おしる侍

不 庭 園 抄
梅の傍に用

少 庭 園 抄
梅の傍に用

梅の傍に用

梅の傍に用

梅の傍に用

やまの河まの何のしと金活
揮條はる祿宜も縁詔ハハを中居
茵ヤこのたふ心はあらを果居
大ニまを夏河宗好の属居
煮立の飯をき満川風居
瓜江のまに豆蟹をわと縁居
御受す六お世然工好居
出茶座さ一すし焚付十の居
浮世一隔工の居
菴居

咲かへん心持う、あはれ日て
清刀も今もたてた高居
耳鏡も干を奇の舞子花の居
おし情も心はるの純居
新宮ふお整の多神居
九尺活中も紅園ハ何り居
哲敬し書るをおう一純法華宗居
散り仕迫一と幸に紅居
菜畑を山に何り居
茶居

似氣のこぶしの相馬百史活

車と屋の建つよいよら勝手あり居

他者の時よのこもあかく菴

十 遠く船と舟とつる蠅活

十 城の町をくわて晒し居

ひの影を月が物と細代金菴

六ハ狐鼠の傳ゆは活

くはくと那を雪の多居

鼻は捷背自よ暗の細さ八活

蒜と小豆は春の日水と菴

おもゆるやまを東石垣居

おもゆるまの道りけり人活

膝あしんこも梅の空各菴

春ちのる水の地や鯉の息 舊白史

其の棘菴主へり水居

鏡ありてけりま社母年 芳室

大坂拜千叟

跋

春の輝きこころ
舞而徳公のまを遊りし
物と合く十成ありぬ
此のまをのまをのま
とほのまをのまをのま
行を春のまをのまをのま
余のまをのまをのま

八
耕

平成元年九月修補

KOM4

